

砂の上の企画 #5

水み分ま

作・演出 司田由幸

2014年4月10日(木)〜13日(日)

@ 旧平櫛田中邸アトリエ

両掌相打って音声あり、おんじょう 隻掌に何の音声かある

——
白隠慧鶴

聞く人もない森の中で木が倒れるときは、音もなく倒れるのだろうか。
聞く耳のないところに音は存在するのだろうか。

——
フレドリック・ブラウン『叫べ、沈黙よ』

一、演者は一人とする。

一、**赤文字**は発語されない。

一、小道具の類は、水と花のみとする。

一、それ以外のあらゆる事象は、自由とする。

時は無い
しん　として　幾時代も動くものも無い
深い洞の岩肌から滲みだしたような水気が
ひと滴の形をともなつて

おちる

と

若い男のかたちをしたもの
ひゅうう、と口許より風が鳴り

場は揺らぎはじめる

男を、
雪が取り囲んでいた。

吹雪が吹き荒れていた。

零下二〇度。

空から吹き降ろすもの。左右から頬に刺さるもの。下から巻き上げるもの。

四方。八方。
雪。

白い圧力が押し寄せていた。

男の歩みは遅かった。が、确实だった。

右足を出す。左足。右足。力強く、根気強かった。

5メートル先は白色の中に沈んでいた。

エゾマツや白樺の木立の中、縫うように移動していた。雪を漕ぎ、立ち泳ぐように進んでいた。

どの枝枝にも雪が覆いかぶさっていた。雪の重さでうなだれていた。微かに覗く葉の緑はほとんど黒に近かった。そこかしこに闇が点在しているようだった。

父の背中

は、
みずうみを目指していた。

ごうごうと風が鳴っていた。空の涯から轟く地響きのようだった。

だのに意識は無音の中にいた。

木立と枝枝、山の斜面を駆け抜け攪拌された吹雪が、音さえ白く塗りつぶしていた。

昼間だというのに山の中は白く騒がっていた。獰猛な雪の弾幕が止むことなくぶつかっては流れていった。

肩から一挺の猟銃を下げていた。こなれ、馴染み、身体の一部のようだった。

皮張りのケースの奥でずしり黒く鈍く輝きいまは眠っていた。

すぐ右脇には大型犬が併走していた。

黒々とした巻き毛の雄のラブラドル犬だった。ヒトの腰丈ほどの深い雪の中に埋れながらも毛並みは

黒く燃えていた。ヴォールクという名を与えられていた。ロシア語で狼を意味した。風が引きちぎった

獲物の臭気を逃すまいと鼻をうごめかしていた。横に一字に開いた口内から赤い舌が飛び出していた。

猛々と白い息が立ちのぼっていた。吐き出されるそばから雪と空に紛れ見えなくなった。

ぴくりと耳を立てた。脚が止まった。呼吸をつめ、白い煙幕の向こう側を見据えていた。走り出した。白波を断ち割るシャチのように雪の海原を泳いだ。

犬の消えた先へ目を走らせた。肩から猟銃を下ろした。

景色の向こう側から、

ぶおん！　ぶおん！　ぶおん！　と

低く3度、吠える声が風に乗ってやってきた。

考えるよりも先に身体が動いていた。

ファスナーを下ろし銃身を取り腰を屈め眼前の白い壁に向かい、突き立てるように猟銃を構えた。

思考が加速し爆ぜた。

ヴォールクは狩りのための訓練をされ尽くしていた。無駄吠えはしなかった。

冬眠し損ねた熊との遭遇を疑った。吐く息が睫毛の先で凍る中、背中に汗が伝った。

息を殺すと、心臓が跳ねた。口内がからからに乾上がった。無理やり唾を飲み下した。

煙る雪風の向こう側を睨み続けた。

歯を使い分厚い皮の手袋を脱ぎ腋に挟んだ。唇に手を当て、びいびいと甲高く鳴らした。

すぐにまた手袋をはめ、銃を構えた。流れるような一連の動作だった。

しばし

その時、

白煙の壁を突き破って飛び

出し

て　来た

黒い　塊に向かって、

人差し指が

引き金を絞らなかつたのは、

愛犬の口にくわえられた深緑色の毛糸の帽子が見えたからだった。

犬は主の足元まで駆け寄ると、帽子を落とし、また吹雪の彼方へと消えていった。

そして今度は目指すべき方向を差し示すかのように声高に空へ向かって吠え続けた。帽子を拾い立ち上がった。駆け出した。

立ち泳ぐようにして雪と枝をかきわけ、急勾配の丘を滑るように駆け下りた。

木々が途切れ、みずうみの畔へと出た。

吹雪を攪拌させる山を抜けたことで視界が開けた。

湛えられた水はいまは分厚く凍っていた。その上に雪が堆積していた。

広大な白一色の雪原だった。どこまでも続くかと思われた。

その只中に、
黒くたなびくものがあった。
黒い焚き火のようだった。

人間の長い黒髪だった。半分雪に埋もれ風に煽られていた。
その周りをヴォールクが輪を描きながらぐるぐると駆け、天に向かい甲高く吠え続けていた。

可能な限りの速度で輪の中心へと近づいていった。
倒れていた人影は、女だった。

死体のように見えた。掘り出すようにして抱き起こした。固く凍えた頬を何度か打った。
彫像のようだった眉間に、新たに微かな皺が刻まれた。

反動をつけ女を肩におぶった。

元来た道へと引き返した。

足元の雪はいつもより深く沈んだ。

くたりと背からこぼれそうだった。何度も掬い上げた。

人の重みを感じた。背には風を感じなくなった。

息があがっていた。口から濛濛と白く立ち昇った。

体温36.7度。熱を孕んだ呼吸は急速に冷却され、気体から液体、人の目に見える微細な粒へと
白く姿を変えた。そして極寒の大きに飲まれ冷え続け分子は振動を緩やかにし凍り結晶し雪となり、
地に降り積もり再び風に舞い上がり白い空へと紛れた。

速度を落とした、二人重なり合う、ひとつの人影があった。

狼の名を持つ黒い獣がその先を先導した。

僕は、

まだ形もなく、父の背と母の腹の間で、**ゆっくりと**上下に揺れていた。

白く翳る山中へと二つの黒点は消えていき、やがて見えなくなった。

*

突き抜けるような青空だった。

視線の先には、一頭の牡鹿。二点間の距離は三〇〇メートルほどあった。高台から見下ろす形だった。
スコープの先で餌を食んでいた。前歯を使いエゾマツの表皮を幹から**器用**に引き剥がしては咀嚼していた。
頭部左右から角が伸びていた。**誇らしげ**に空に枝分かれ屹立していた。

スコープの示す十字が牡鹿の上を撫でるかのように呼吸に揺れた。
次、頭をもたげた時に撃とうと決めていた。

息をそろえるかのように見つめ続けた。体温がすうっと落ちていった。まず音が消えた。

そして呼吸、鼓動、脈拍が消えた。**自分**が雪や木々の一部になったかのような錯覚。

ぶれていたフォークスがびたりと止まった。**ふう**と牡鹿がこちらを、見た。

見えているわけはなかった。風下だった。

しかし、見つめあうか、の、よ